

「まちの縁側」育みプロジェクト

エリア：日光市（旧今市市）豊岡地区

パートナー：日光市社会福祉協議会

14 班

コミュニティデザイン学科 桂野葵 木村賢斗

建築都市デザイン学科 丸山穰 東原幸乃実

社会基盤デザイン学科 植木星吾

①背景

まちのコミュニティの変遷 生活スタイルや価値観の多様化に伴う地域のつながりの希薄化により、地域の抱える福祉ニーズが多様化・深刻化している。	従来のサロン活動の負担 従来のサロン活動はイベント性が強く、参加者層の偏りや担い手の負担が大きいことが課題である。
---	---

③プロジェクトの概要

まちの縁側とは 自然発生的に人が集う場のことであり、昔ながらの日本の家屋にある「縁側」のように、お茶を飲みながらコミュニケーションを図ることができる場などを指す。近所のお茶会や井戸端会議、公園のベンチ、お店やスーパーの休憩所などが例に挙げられる。		対象とするエリア 旧今市市の豊岡地区を対象とする。農林業が盛んなに行われ、雄大な自然を身近に感じられることが特徴である。今回私たちが提案するのは、豊岡地区の倉ヶ崎の市営住宅近辺である。周辺にはスーパーやコンビニがなく、大型商業施設からも離れた場所に位置している。	
---	---	---	---

②目的

地域特性にあった「まちの縁側」 担い手の負担が少ない「まちの縁側」を推進し、人々が日常的に集まる「まちの縁側」を提案して、従来のサロン活動と併用することで地域内交流の促進と地域のつながりの再構築を図る。

④調査方法と分析結果

前年に引き続き、地域の特徴であった「まちの縁側」を模索した。旧今市市の豊岡地区を調査対象としたが、足を運ぶうちに、調査対象範囲内の自治会ごとに地域性が異なることがわかった。そのため最終的には、対象エリアを倉ヶ崎自治会地区に絞るに至った。8月31日に参加したまちの縁側講座や12月10日に実施した倉ヶ崎自治会地区の市営住宅訪問を通して、地域の方にヒアリングを行い「まちの縁側」に対する理解を深めることができた。

地域の課題 関係性を築きたくても築けない移住してきた人々の孤立	「縁側」の認知度の低さ 定住者と移住者が繋がりにくい		移住者の中でも居住年数や年齢の幅がある 市営住宅内での身近なコミュニティがない
	1stcycle 農家と新興住宅が混在する地域性 移住者と定住者が繋がる「縁側」	2ndcycle 移住者へのヒアリング 移住者が訪れやすい場の模索（調査対象を市営住宅に絞る）	3rdcycle 多趣味で活発な住民の特徴を活かした市営住宅での日常的な「縁側」の提案
	豊岡地区の地域性 農家と新興住宅が混在している 歩道が整備されているところが少なく、危険箇所が多い 農家同士の既存のコミュニティに入れない地域の人が多い（移住者） サロン活動に参加することで人と繋がりを確保している（移住者） 自治会の繋がりでなく、地域の行事（お祭りなど）を通して輪が広がる地域もある 日中はガーデニング等で、家の外で活動する住民が多く見られた 地域内の点在する公園では人の姿が見られなかった	定住者↓移住者 移住者が増えることでの住みにくさ 繋がりたいけどキッカケがない 特にアパート住人との繋がりが少ない ヒトを通じたキッカケがほしい こどもを通じた行事があると繋がりがやすい	縁側への意見 縁側があればサポートしたい 縁側の中心人物から住民にコンタクトして欲しい

6/25 地域の活動団体へのヒアリング (倉ヶ崎、佐下部)
 7/2 現地調査(大桑)
 7/8 まち歩き(倉ヶ崎)

1stcycle

8/31 まちの縁側講座/まち歩き
 参加者へのヒアリング
 (倉ヶ崎、豊田、大谷向、大桑)

2ndcycle

12/10 市営住宅ヒアリング(倉ヶ崎)

3rdcycle

倉ヶ崎市営住宅の住民8人にヒアリング(シルバーハウジング入居者)

住民の年齢 最高87歳 最低68歳⇒年齢差19ポイント	日常的な縁側に求めるもの 気軽に足を運べ、日頃から顔の見える関係を作れる場
共通の趣味で繋がりにくい 市営住宅の既存コミュニティである「ティータイム」に足を運びにくい	困りごと 買い物、自炊が困難である

⑤「まちの縁側」の提案

倉ヶ崎市営住宅の現状 ・住居者の方々は一人暮らしが多い ・定期的なサロンだけでは寂しさを感じる ことが多い	住民の意見・要望 ・バスの利用が多い ・趣味活動(温泉・編み物・料理など) ・生活上の悩み(自炊が大変など) ・要望 (気軽にコーヒーが飲める場所が欲しい)
---	--

- (i) 住民の利用頻度が高い場所における”共有型休憩スペース”の設置
 バス停や酒屋(金子ストア)付近に、ベンチや足湯などといった様々な人が利用・共有できる休憩スペースを設置する。
- (ii) 使用されていない集会所の日常開放
 集会所のキッチンを活用して料理を作ったり、また、住民各々で料理を持ち寄りながら、皆で食事を共有出来る場とする。他にも、趣味活動を共有できる場とする。

